

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra”！

(“法華経観”を見つける旅に出よう！)

『妙法蓮華経 薬王菩薩本事品 第二十三』 (ほんもん 流通ぶん)

○ 『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん

者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○ 『其の習學せざる者は、これを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○ 「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

○ 『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得

たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)

○ 『十分の一でも実践できれば、また一つでも徹することができれば、立派な精進』



<薬王菩薩本事品のあらすじ>

【娑婆世界で活躍する『薬王菩薩』のこれまでの積徳の行について質問】—

【三五頁一行】『囑累品』で無数の菩薩たちが世尊から『総付属・そふそ』を頂き、一同が大歡喜にひたっている時、宿王華(しゅおうけ)菩薩が、世尊にお尋ねしました。

「世尊よ。薬王(やくおう)菩薩が、この娑婆世界で衆生を自由自在に救う素晴らしいはたらきをされていますが、それはおそらく、薬王菩薩が百千万億那由他(なゆた)という計り知れない数の難行苦行を積んでこられたからこそ、果たせるものではないかと推測します。世尊よ、どうぞこのことが正しいか、詳しくお教えいただけないでしょうか？ もしこのことを伺いましたら、天人、竜神、鬼神、人間、人間以外の生き物たち、そして他の国土から来た菩薩や、この娑婆世界の出家修行者たちは皆、大いに歡喜するものと存じます」

【宿王華菩薩の質問に世尊が答える(薬王菩薩の過去世について)]—

【三五頁五行】するとその問に対して、世尊は宿王華菩薩にお答えになりました。

「無量恒河沙劫(むりようごうがしゃこう)という計り知れない昔、日月淨明德(にちがつじょうみょうとく)如来という仏がおられました。その時、八十億という数多い大菩薩と七十二恒河沙(ごうがしゃ)という無数の大声聞がいました。そしてその仏の寿命は四万二千劫(ごう)という果てしない期間であり、菩薩たちの寿命もまた、同じ長い期間を寿命としていました」

【三五頁終二行】『彼(か)の國には女人(にょにん)・地獄・餓鬼・畜生・阿修羅等及び諸難あることなし』

「その国には、女人もいなければ、『怒り(地獄)・貪り(餓鬼)・愚痴(畜生)・鬭争(修羅) / (『四悪趣(しあくしゆ)の心』)』という醜(みにく)い心を持つ者はいません。(※女人がいない)というのは、古代の社会通念で「女人は罪が多く」男子の修行の障害とされていた。その否定を込めて)そして、それから生じる苦悩もありません。大地の地形は平らで、まるで掌(てのひら)のようで凹凸(おうとつ)がありません。しかも全てが宝石で設(しつら)えられ、美しい宝樹(ほうじゆ)が国土を飾り、宝石の幔幕(まんまく)が大地を覆(おお)っています。宝石を散りばめた美しい旗が天空から垂れ下がり、宝玉(ほうぎよく)の瓶(かめ)や香炉(こうろ)が国中にあまねく満ち溢(あふ)れていました。宝樹(ほうじゆ)の一本一本の木々には七宝の台座があり、 / 『一箭道(ひとやたけ)を盡(つ)くせり』その台座から弓矢の届く範囲に一つずつ台座がありました。そしてその台座には菩薩や声聞が坐し、それぞれの頭上にはたくさんの天人が飛来して、天の音楽を奏(かな)でて仏讃歌を歌い、供養を捧(たも)っています」

【三六頁五行】「そのとき、日月淨明德(にちがつじょうみょうとく)如来は一切衆生見(いっさいしゆじよきけん)菩薩をはじめとする多くの菩薩たちや声聞に『法華經』をお説きになられました。それをつぶさに伺った一切衆生見(いっさいしゆじよきけん)菩薩は自ら進んで苦行を修め、日月淨明德如来が説かれる教えを一心に学び修行し、精進を極めました。このような仏の悟りを求める修行が一万二千年間も続き、その修行の結果、『現一切色身三昧・げんいっさいしんざんまい』という境地を得たのでした。この『現一切色身三昧』という境地は、導く相手に応じて、ふさわしい姿を現じ、自由自在に法を説くことができる境地』を言います。そしてこの自由自在にできる力を“独(ひとり)で”に、かつ“間違いなく”發揮(はき)できるという尊い境地を、一切衆生見(いっさいしゆじよきけん)菩薩は得たのでした」

【三六頁終五行】「そのとき一切衆生見(いっさいしゆじよきけん)菩薩は大いに歓喜し、次のように思いました。『私がこのように尊い境地を得ることができたのは、 / 『皆是(こ)れ法華經を聞くことを得(う)る力なり』まさに法華經を聞かせて頂いたおかげだ。だからこそ日月淨明德(にちがつじょうみょうとく)如来に感謝の供養をさせて頂こう』と決意しました」

【三六頁終三行】「そう決意した一切衆生見(いっさいしゆじよきけん)菩薩は即座に供養の三昧(さんまい)に入られ、大神力を用いて天上界に咲く曼陀羅華(まんたらけ)などの花々や、そしてわずかな量でも地球一つに匹敵する尊い価値を持つ海此岸(かいしがん)の香(こう)や栴檀香(せんたんこう)を、空全体に雲が広がるように虚空(こくう)から香(こう)を降り注ぎ、仏を供養したのでありました」

【一切衆生見(いっさいしゆじよきけん)菩薩(薬王菩薩の前身)が『焼身供養』する】——

【三七頁一行】「この供養を終え、三昧(さんまい)から立ち上がった一切衆生見(いっさいしゆじよきけん)菩薩は、あらためて次のように思い直しました。 / 『我神力を以て佛を供養すと雖(いえど)も身を以て供養せんには如(し)かじ』『確かにこうした神通力による供養も大切だが、自分自身の“身を以て行う供養”の方が、より大切ではないだろうか?』。そう考えた一切衆生見(いっさいしゆじよきけん)菩薩

は、／『諸(もろもろ)の華香油(けこうゆ)を飲むこと千二百歳を満じ已(おわ)って』芳(かくわ)しい香りがする梅檀(せんだん)をはじめとする様々な香油を千二百年間にわたって飲み続けました。その上、香油を身に塗り、天人の宝の衣を身にまとい、さらにその上に香油を注ぎ、日月淨明徳如来の前で／『神通力の願(がん)を以(もつ)て自ら身を然(とも)して』【焼身供養(しょうんくよう)】という自分の体に火を付けて自らが“燈明”となる供養をしました。するとその炎は、八十億恒河沙(ごうがしゃ)という無数の世界を照らし続けたのでした」

【三七頁 七行】「その光を見た諸仏(しよぶつ)は声をそろえて讚(た)えました。『じつに立派である。／(『是(こ)れ眞(まこと)の精進(しやうじん)なり、是(こ)れを眞(まこと)の法(ほふ)をもって如来(にょらい)を供養(くよう)すと名(なづ)く』)これこそが眞(まこと)の精進(しやうじん)、眞(まこと)の供養(くよう)である。たとえ美しい花々や香木、宝石の首飾り、焼香や身に塗る香(こう)、豪華(ごうか)な天蓋(てんがい)や幟旗(のぼりばた)、最高の香や豪華(ごうか)な品々、そして宝(たから)や、国(くに)、城(しろ)、妻子(しよし)までを捧げる供養(くよう)であっても、これに及ぶものはない。善男子(ぜんなんし)よ、／(『是(こ)れを第一(だいいち)の施(せ)と名(なづ)く。諸(もろもろ)の施(せ)の中に於(お)て最尊(さいそん)最上(さいじやう)なり、法(ほふ)を以(もつ)て諸(もろもろ)の如来(にょらい)を供養(くよう)するが故(ゆゑ)にと』)これこそが第一(だいいち)の布施(ふせ)である。なぜならば、それは教えをもって仏(ぶつ)を供養(くよう)することに他(ほか)ならないからである』と、口々に一切衆生(いっせしやうじやう)意見(いけん)菩薩(ぼさつ)を讚歎(さんたん)したのでした」

【諸仏が、一切衆生意見菩薩の『焼身供養』を黙って見届ける】——

【三八頁 一行】「そしてこのように讚歎した諸仏(しよぶつ)は、一切衆生意見菩薩(いっせしやうじやういけんぼさつ)の【焼身供養(しょうんくよう)】の尊(たう)い姿(すがた)を／(『各(おのおの)黙然(もくねん)したもう』)じっと黙(もく)って見届(みと)けられ、その火(ひ)は千二百年間(せんにひゃくにじゅうねんかん)、燃(も)え続けました。こうして教えに対する供養(くよう)を終(お)えた一切衆生意見菩薩(いっせしやうじやういけんぼさつ)は寿命(じゆみん)を果(は)たし、その後(そののち)、再び(また)日月淨明徳(にちがつじやうみんとく)如来(にょらい)のみもとで淨徳王(じやうとくおう)という国王(こわう)の子(こ)として生まれ変わりました。

【『焼身供養』した一切衆生意見菩薩が、日月淨明徳如来の世に生まれ変わる】——

しかも結跏趺坐(けっかふざ)という仏(ぶつ)がお座り(ざ)になられる姿(すがた)をして生まれたのでありました。このことはすなわち、生まれながらにして仏(ぶつ)の徳分(とくぶん)を有(あ)り、仏法(ぶつぽう)を体得(たいとく)している意味(いみ)にほかなりません。そして誕生(たうじん)するやいなや、王子(おうし)は父王(ちちおう)に謁(げ)を用(もち)いて次(つぎ)のように申し上げました」

【(偈)三八頁 六行】「『大王(だいおう)よ。私はかつて日月淨明徳(にちがつじやうみんとく)仏(ぶつ)のもとで修行(しゆぎやう)し、すぐに一切現諸身三昧(いっさいげんしよんさんまい)という高い境地(きんぢ)を得(え)ることができましたが、／(『大精進(だいしやうじん)を勤行(ごんぎやう)して所愛(しよあい)の身(み)を捨(す)てにき』)そこでとどまらずさらに大精進(だいしやうじん)をなして、我が身(み)を捨(す)てる“自己犠牲(じこぎせい)の行(ぎやう)”を果(は)たすことができました』」

【三八頁 八行】「そして、この偈(げ)を終(お)えると、さらに言葉を續(つ)けて父王(ちちおう)に申し上げました。

『日月淨明徳(にちがつじやうみんとく)仏(ぶつ)は今(いま)なお現(げん)におられます。私は過去世(こくごせ)において仏(ぶつ)さまを供養(くよう)することによって、一切衆生(いっせしやうじやう)が語る言葉(ことば)を聞いてその者の心(こゝろ)の奥(おく)を見抜(みぬ)く力(ちから)【解一切衆生語言陀羅尼(げいっせしやうごんごらに)】という神力(しんぢりき)を得(え)ることができ、その結果(けつこ)、八百千万億那由他(やっぴやくまんいっぴやくなんぢゆうた)を超(こ)える無数(むすう)の法華經(ほふけ)の偈(げ)を聞(き)くことができました。そのために私は、生まれ変わって再び、仏(ぶつ)さま

のもとへ赴(おもむ)き、感謝の供養を申し上げたいと願っているのです』と述べました。すると王子は七宝の台に座り、七多羅樹(しちたらじゆ)という高さの天空まで昇っていきました。そして日月浄明徳如来の前に進み出て、額を仏のみ足に付けて礼拝し、合掌して次のように讃歎の偈を申し上げたのでした」

【(偈)三九頁 二行】『仏さまのお顔はこの上なく尊く、発する光明は十方世界を照らしています。私は再びお傍(そば)近くに参ることができました。誠に有り難いことです。お懐(なつ)かしゅうございます』とご挨拶しました」

【三九頁 四行】「そして一切衆生慧見(いっさいじゆじょうきけん)菩薩は、心の底から感激して、さらに次のように申し上げました。／『世尊、世尊猶故(なお)世(よ)に在(まします)』『世尊、世尊がこうして、この世におられるとは・・・』」

【三九頁 五行】「その時、日月浄明徳(にちがつじょうみょうとく)仏は一切衆生慧見(いっさいじゆじょうきけん)菩薩にお告げになりました」

【三九頁 六行】『善男子よ。私は涅槃の時を間近に迎えています。そなたは私の最期(さいご)の床(とこ)を用意しなさい。じつは私は今晚、入滅を迎えます。善男子よ。／『我佛法を以(もつ)て汝(なんじ)に屬累(ぞくろい)す』そなたに仏法を説き弘めることを託したいと思います。諸々の菩薩や大弟子たち、そして、この三千世界の宝のような美しい世界のすべて、あらゆる諸天善神も、すべて管理をそなたに任せます。そればかりか、私の入滅後の遺骨も任せます。ですから世の人々にそれを分けて、世の人々が仏を供養できるようたくさんの仏塔を建てるように計らってください。このことはすなわち、仏舍利を供養することで、一切衆生に仏を恋慕渴仰(れんぼかつごう)する心を起こさせるために行うのです』とおおせつけになりました」

【三九頁 終二行】「そして日月浄明徳如来はその言葉の通りその晩、入滅されました。一切衆生慧見菩薩は仏の滅度を目(ま)の当たりにし、大いに悲しみ嘆きました。仏を恋慕(れんぼ)する気持ちはつのるばかりで、この世の中心にある須弥山(しゆみせん)の麓(ふもと)にある海岸に、栴檀(せんたん)という香木(こうぼく)を高く積み上げて仏さまを荼毘(たひ)に付(ぶ)しました。そして天空へとそびえる美しく輝く八万四千の仏舍利塔を建てて供養しました」

【三四〇頁 五行】「その時、一切衆生慧見(いっさいじゆじょうきけん)菩薩は心に深く思いました。『この立派な塔を建てる供養だけでは、／『我是(こ)の供養を作(な)すと雖(いえど)も心猶(な)お未だ足らず』とても仏に対する私の供養の心は満たされない。物足りない。もっと深く仏を供養しよう』と思ったのでした」

【三四〇頁 六行】「すると一切衆生慧見菩薩は、諸々の菩薩や天界の神々や鬼神、そして一切の人々に対して告げました。『みなさん。一心に念じて下さい。私はこれから日月浄明徳如来の舍利を供養申し上げます』と」

【生まれ変わった一切衆生慧見菩薩が、再び『焼身供養(両腕を灯明にする)』——

【三四〇頁 終五行】「こう告げると一切衆生慧見菩薩は八万四千の仏舍利塔の前で自分の両腕に火をつけ、如来の徳を讃え、感謝する“燈明”としたのでした。この燈明は七万二千年間も燃え続け、迷いの闇を除く光明となったため、仏弟子たちは“仏の悟りに向かって精進する決意”を

固めることができたのでした。と同時に無数の菩薩たちは、かつて一切衆生熹見菩薩が得た『現一切色身三昧げんいさいしんざんまい』という境地。つまり自由自在に人々を導く力を得ることができたのでした」

【三四〇頁終二行】「しかし諸々の菩薩や神々、鬼神たちは、一切衆生熹見菩薩の両腕が燃え尽きて無くしてしまったことを心配し、一同は嘆きました」

【三四一頁二行】「それを見た一切衆生熹見菩薩は、みんなを慰め、次のように言いました。

『皆さん心配はいりません。確かに私の両腕は無くなってしまいましたが、その代わりに私は“金色の仏の身”を得ることができました。このことが真実ならば、私の両腕は必ず元通りになるであります』

【『焼身供養』して燃え尽きた両腕が、自然に元通りになる】——

【三四一頁四行】「そう言ったかと思うと、／（『自然(じねん)に還復(げんぶく)しぬ』）一切衆生熹見菩薩の両腕は、たちまちに自然に元に戻ったのでした。これはこの菩薩が前世から積み上げて来た善行の功德が純粋無垢(じゅんすいむく)であり、具えている智慧が極めて奥深いものであったために、以上のような不可思議な現象が現われたのでした」

【三四一頁六行】「すると全宇宙は感激によって六種に揺(ゆ)れ動き、天空からは美しい花びらが降り注がれ、全ての天人や人々は、経験したことが無い感動を覚えました」

【釈尊が、『自己犠牲』の尊さを説き示す】——

【三四一頁七行】以上の話を終えると釈迦牟尼如来は、宿王華菩薩に語りかけられました。

【三四一頁終四行】「この一切衆生熹見菩薩は、ほかでもありません薬王菩薩の前身なのです。薬王菩薩はこのように尊い『自己犠牲』による布施行を徹底的に果たされたのでした。よいですか宿王華菩薩よ。もし仏の智慧を得たいと望むならば、／（『能(よ)く手の指・乃至(ない)足の一指(いっし)を然(とも)して佛塔に供養せよ』）自らの手の指一本、足の指一本でも良いから、それを燈明として仏塔に供養するのです。それは国や城、妻子や三千大千世界の山や池など全ての国土を捧げる供養よりも尊く、最も優(すぐ)れた供養なのです。あらゆる金銀財宝を捧げるよりも、自己犠牲による『法の実践』の方が、他に比較できないほど最高の供養なのです」

【三四一頁終行】「それは三千大千世界に満ちるほどの七宝(しっぽう)、つまり金・銀・瑠璃(るり)・青紫色の宝石・磤磤(しゃこ)・貝(かい)の一種、またはサンゴ・瑪瑙(めう)・エメラルド・真珠・玫瑰(まいえ)・赤色の宝石などの宝を捧げ、仏と大菩薩、声聞と縁覚の仏弟子に供養したとしましょう。しかしそれによって得る功德でさえも、／（『其(そ)の福の最も多きには如(し)かじ』）法華經の短い一節でも信じて『自己犠牲』によって得る功德には、到底、及びもつきません」

【『法華經』の素晴らしさを、「十の譬え」をもって説き示す】——

【十諭称歎・じゅうゆしょうたん】——

【三四二頁三行】「宿王華(しゅおうけ)よ。なぜそうなのかといえは、

【三四二頁三行】①（『一切の川流(せんる)・江河(こうが)の諸水(しよすい)の中(なか)に、海鳥(うみこ)れ第一」

なるが如く』たとえば小川から大河に至るまで水と名の付くものの中で、なんととっても『海』が最大であるように、仏の数多い教えの中で『法華經』こそ、一番深く偉大な教えであるからです。

—【すべての教えを包容する】

【三四二頁五行】② 『土山(どせん)・黒山(こくせん)～衆山(しゅせん)の中(なか)に、須彌山(しゅみせん)爲(こ)れ第一なるが如く』 またあらゆる山の中で『須彌山・しゅみせん』が第一であるように。

—【最高かつ中心となる教え】

【三四二頁七行】③ 『衆星(しゅしゅう)の中に月天子(がってんじ)最(もっと)も爲(こ)れ第一なるが如く』 夜に輝く星の中で『月』が最も明るいように。

—【世を明るく照らす教え】

【三四二頁終四行】④ 『日天子(にってんじ)の能(よ)く諸(もろもろ)の闇(やみ)を除くが如く』 『太陽』の光がたちまちに全ての闇を打ち消すように。

—【不善の闇を照破する教え】

【三四二頁終三行】⑤ 『諸(もろもろ)の小王(しょうおう)の中に、轉輪聖王(てんりんじょうおう)最(もっと)も爲(こ)れ第一なるが如く』 諸々の王の中で『轉輪聖王・てんりんじょうおう』が最高であるように。

—【感化力第一の教え】

【三四二頁終二行】⑥ 『帝釋(たいしゃく)の三十三天の中に於て王なるが如く』 三十三の守護神の中で『帝釈天』が最高であるように。

—【救済者中の救済者】

【三四三頁一行】⑦ 『大梵天王(だいぼんでんのう)の一切衆生の父なるが如く』 『大梵天王(だいぼんでんのう)』があらゆる者の父であり、あらゆる智者・修行者・菩薩を仏道へ導くように。

—【仏道へ導く父・仏教の包容性】

【三四三頁二行】⑧ 『一切の凡夫人(ほんぷにん)の中に～是(こ)れ第一なるが如く』 『仏の教えを信じ、護持する者』が、一切衆生の中で第一の存在であるように。

—【一切衆生中第一の人間】

【三四三頁六行】⑨ 『一切衆生の中に於て亦爲(またこ)れ第一なり』 菩薩・声聞・縁覚をはじめとする仏弟子の中で『菩薩』が第一の存在であるように。

—【独善的でない菩薩第一】

【三四三頁終五行】⑩ 『佛は爲(こ)れ諸法の王なるが如く』 『仏』がすべての教えの王であるように。

—【諸經の王】

【三四三頁終四行】 『諸經(しよきょう)の中の王なり』 『法華經』こそが“諸經の王”なのであります」

— 【十諭称歎・じゅうゆしょうたん】

【『法華經』の素晴らしさ。乾ける者の水であり、子における母…】—

【三四三頁終四行】 釈尊はさらに説かれます。「宿王華菩薩よ。よいですか。／ 『此の經は能(よ)く一切衆生を救いたもう者なり。～諸(もろもろ)の苦惱を離れしめたもう。此の經は能(よ)く大(おおい)に一切衆生を饒益(にょうやく)して、其(そ)の願(がん)を充滿(じゅうまん)せしめたもう』』 この『法華經』は一切衆生を救い、苦惱から離れさせ、精神的にも物質的にも豊かな尊い利益を与え、その願いを満足させるものであります。それはあたかも、喉(のど)の渇きに苦しむ者が池の清水を飲んで満足するように、寒さに震(ふる)える者が温かい火を得て満足するように、裸の者が着物を得たように、長旅をする商人が優秀な案内人を得たように、子が母と出会えたように、渡し場で船を見つけることができたように、病人が医師と出会えたように、貧しい者が宝を得たように、人

民が素晴らしい統治者を得たように、貿易者が平穏な海路を見つけたように、松明(たいまつ)の火が闇を消し去るように、この法華経もちょうどそのような素晴らしい力を持つものであります。／『能(よ)く衆生をして一切の苦・一切の病痛(びょうつう)を離れ、能(よ)く一切の生死(しょうじ)の縛(ばく)を解(と)かしたもう』『法華経』は、一切衆生の悩み・病気による苦を取り除き、生死(しょうじ)の輪廻の束縛から解き放つものです」

【『法華経』を実践し、讃歎する功德は計り知れない】——

【三四頁五行】「もしある人が法華経を聞くことができ、自ら書写するばかりでなく、人にも書写させたとしましょう。その人の得る功德というものは、／『所得の功德、佛の智慧を以て多少を籌量(ちゅうりょう)すとも其(そ)の邊(ほとり)を得(え)じ』 仏の智慧を以ってしても計り知ることができないほど、極めて大きいのです。もしある人が、経巻を書写して、それに花を捧げ、香を焚き、香油を捧げて供養したとしましょう。／『所得の功德亦復(またまた)無量ならん』 その功德は計り知ることにはできません」

【三四頁終四行】「宿王華よ。もしある者がこの『薬王菩薩本事品』を聞くことができたならば、その功德は計り知れません。そしてこの教えをしっかりと受持することが出来た女性は、／『是(こ)の女身(にょしん)を盡(つ)くして後(のち)に復(また)受けじ』『男女の差別』で苦しむようなことなど無くなります」

【三四頁一行】『若(も)し如来の滅後、後(のち)の五百歳の中に』「もし如来の入滅の500年後、そこに一人の女性が法華経を聞いて実践するならば、／『即(すなわ)ち安樂世界(あんらくせかい)の阿彌陀佛(あみだぶつ)の大菩薩衆の～蓮華の中の寶座(ほうざ)の上に生ぜん』阿彌陀如来が多くの大菩薩衆に囲まれている“極樂世界”に生まれ変わることができるでしょう。この經典を受持する者は、貪欲や怒り、本能に赴(おもむ)くままに行動する愚かさ(貪とん・瞋じん・痴ち)に苦しむことはありません。またおごり高ぶる心やねたむ心、様々な迷いに苦しむこともありません」

【『法華経』によって『空(くう)』を知るものは無数の仏を見る者】——

【三四頁五行】『菩薩の神通・無生法忍(むしょうぼうにん)を得(え)ん』「またその人は、菩薩としての神力を具え、一切が「一つ」であるという『空』の教えを体得し、さまざまな現象世界の“変化”に惑(まど)わされることのない境地(『無生法忍(むしょうぼうにん)』)に達します。そのために何ものにもとらわれない・片寄らない澄(す)み切った清浄な『もの見方』を具えるようになり、七百万二千億那由他恒河沙(なゆたごうがしゃ)という数え切れない数の『仏を見る』ことができるようになります。ですから、そのような人に対して、／『是(こ)の時に諸佛、～善哉善哉(ぜんざいぜんざい)、善男子、汝能(なんじよ)く釋迦牟尼佛の法の中(なか)に於て』あらゆる諸仏が、口をそろえて讃えるであります。『よろしい。よろしい。善男子よ。そなたは釈迦牟尼仏の教えに従い、法華経をしつかりと受持し、《五種法師の行》をよくぞ実践された。／『所得(しょうとく)の福德(ふくとく)無量無邊(むへん)なり。火も焼くこと能(あた)わず、水も漂(ただよ)わすこと能(あた)わじ。汝が功德は、千佛共(とも)に説きたもうとも、盡(つ)くさしむること能(あた)わじ』 そのため計り知れない功德を得るでしょう。その功德は確固たるもので、火にも焼かれず、水にも流されない強固なもので

す。そなたのなした功德は、千の仏が一緒になって法を説かれても、尽くすことのできないほど甚大な功德です。 / (『諸(もろもろ)の魔賊(まぞく)を破(は)し、生死(しょうじ)の軍を壊(え)し、諸餘(しよよ)の怨敵(おんてき)皆悉(みなことごとく)摧滅(さいめつ)せり』) あらゆる魔を打ち払い、現象の変化という難敵を克服し、あらゆる心の敵をすべて打ち砕くことができます。 / (『善男子、百千の諸佛、神通力を以て共に汝を守護したもう』) ですから善男子よ。法華經を實踐する者は百千の諸仏が守護するのです」

【三四頁終行】「一切世間の天人や人間のなかで、そなたに及び者はいません。如来を除いて、声聞や縁覚、菩薩などの仏弟子も、そなたが得た智慧と禅定の深さに及び者はいません」と諸仏が讃歎するのです」

【三四頁二行】「宿王華よ。よいですか。この『薬王菩薩本事品』を聞いて心から有難いと思ったならば、 / (『口の中(うち)より常に青蓮華(しょうれんげ)の香(か)を出(いだ)し、身の毛孔(もうく)の中(なか)より常に牛頭梅檀(ごすせんたん)の香(か)を出(いだ)さん』) その人は口から常に青蓮華(しょうれんげ)の香りを放ち、体全体の毛穴という毛穴全てから牛頭梅檀(ごすせんたん)の香りを放つが如く“周囲の人々を感化させ、高い徳と善へと導く”ことでありましょう。その人の得る功德というものは、このように素晴らしいのであります」

【『自己犠牲』の尊さを説く『薬王菩薩本事品』を説き広めることを勧める】——

【三四頁六行】「そのようなわけで、宿王華よ。 / (『此の薬王菩薩本事品を以て汝に屬累(ぞくろい)す』) この『薬王菩薩本事品』を説き広めることをそなたに任せます。どうか後の五百歳に、この地球上において法を説き広め、魔や悪鬼がすべての人々の心を迷わすことのないように教化をそなたに任せたいのです」

【三四頁八行】「宿王華よ。あなたは、あらゆる力・神力を尽くしてこの教えを護(まも)らなければなりません。なぜならば、 / (『此の經は則(すなわ)ち爲(こ)れ閻浮提(えんぶだい)の人の病(やまい)の良薬(りうやく)なり～病(やまい)即(すなわ)ち消滅して不老不死ならん』) この教えは世界人類の心の病の『良薬』であるからです。もし心の病を持つ人がこの法華經を聞くことができたならば、その病いはたちまちに消滅して、老死の苦しみから解脱することができるでありましょう」

【『薬王菩薩本事品』を説き広める者が得る功德】——

【三四頁終二行】「宿王華よ。この法華經を受持する者を見たならば、青蓮華(しょうれんげ)を以って供養しなさい。そして次のように念じなければなりません。『この人は、長い年月を待たずして仏の悟りの座に坐し、魔の軍隊を退かせ、仏の智慧に達するであろう。そして、ほら貝を吹き鳴らし、鼓(つづみ)を打ち鳴らすように、遥(はる)か遠い地まで法を説き広め、 / (『一切衆生の老・病・死の海を度脱(どだつ)すべし』) 一切衆生をあらゆる人生苦から解き放つであろう』と念じるのです」

【三七頁四行】このように『薬王菩薩本事品』をお説きになりますと、教えを聴聞(ちょうもん)していた八万四千におよぶ菩薩たちは、《解一切衆生語言陀羅尼(かいしつしゅうごんごんだに)》という「相手の心を見抜き、それに適切な教えを説く力」を得ることができました」

【(宝塔の中にいる)多宝如来が、薬王菩薩の徳を尋ねた宿王華菩薩を讃歎】——

【三四七頁五行】『多寶如来寶塔(ほうとう)の中(うち)に於て、宿王華菩薩を讚(ほ)めて言(のたま)わく、善哉善哉(ぜんざいぜんざい)、宿王華(しゅくおうけ)、汝(なんじ)不可思議の功徳を成就して』その時、多宝如来が宝塔の中から声を発せられ、宿王華菩薩を讃えたのであります。

「善いかな。善いかな。宿王華よ。そなたはよくそ釈迦牟尼仏に大事な質問をしてくださいました。そなたは計り知ることのできないほどの素晴らしい功徳を成就したことになります。そなたが質問したことによって、一切衆生すべてが教えの尊さを知ることになり、それによって衆生が尊い功徳を得ることができるようになりました。本当に素晴らしいことです」と宿王華菩薩の素晴らしさを多宝如来が“証明”したのでした。



じつれい じっせん 実例こそ実践をうながす

(P306・2行/P225・終2行)

「実践」ということが、言うのは優しいけれども、凡夫にとってはなかなか容易ならぬことなのです。～ほんとうに実践するとなると、やはりもう一つダメ押しが必要なのです。そのダメ押しとは何かと言え、～何と言っても「**実例**」が一番です。

ぼさつ しゅじょう もはん 菩薩は衆生の模範

(P308・1行/P227・1行)

凡夫には手本が必要です。仏の道を実践するには誰を手本にしたら良いかといえば、もちろん「お釈迦さま」です。ところが、お釈迦さまは「完全無欠」なお方であって、～凡夫の身としては、どこから真似していいか、とまどいを覚えざるをえません。それに対して「菩薩」は一つの徳、一つの徳の行いを特徴的に現わされているので、我々にとっては丁度いい目標、手ごろな手本になります。～

二十三番以後の重要性はここにあるのであって、決しておろそかにしてはならないのです。

じ こぎせい 自己犠牲について

(P312・終3行/P230・5行)

自己犠牲の精神こそ、人間のいちばん高貴な精神なのであります。～大勢の利益のためには、自分の欲望はある程度犠牲にする。～——人間にとって自己犠牲ほど高貴な精神はない。

しゆい 《愚性のひととき ①》

自己犠牲の精神こそ、人間のいちばん高貴な精神だと庭野開祖は示します。
— この「自己を犠牲にするとは、どういうことなのか?」。そして、「今の自分にとっての自己犠牲とは何をすることなのか?」。考えてみましょう。

※『忘己利他もにりた』/「己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり」伝教大師最澄 『山家学生式・さんかくしょうしき』

『無立場』/庭野日鏡会長、法華経観

げんいっさいしきしんざんまい
現一切色身三昧

(P330・3行/P243・5行)

〈現一切色身三昧〉というのは、導く相手に応じて、それにふさわしい姿を現じ、それにふさわしい教えを説く、自由自在な力が身にそなわった境地（独りで自由自在にできて、誤りが一つもない境地）を言います。～ なるべく私というものを捨て、できるだけ無我の心になってやれば、あまりひどい間違いは起こさないものです。しかも、そういった無我に成りきる訓練を、常に自分自身に課し、それを繰り返していくうちに、少しずつ「現一切色身三昧」に近づいていくものなのであります。

われじんりき もつ ほとけ くよう いえど み もつ じくよう し
『我神力を以て 佛を供養すと 雖も 身を以て供養せんには如かじ』 (三三七頁 二行)

こうして神力によって仏さまを供養するよりも、自分の身を以て供養する方が大切なのではないだろうか。

こ しん しょうじん こ しん ほう によらい くよう なづ
『是れ眞の精進なり、是れを眞の法をもって 如来を供養すと名く』 (三三七頁 終五行)

しん ほう によらい くよう
眞の法をもって如来を供養す

(P340・1行/P251・6行)

自己犠牲の行為によって、仏法のすばらしさを世の人々にまざまざと見せ、帰依の心を起こさせることこそ、「本当の供養」である。

しゆい
《息惛のひととき ②》

供養には「利供養・りくよう/敬供養・きょうくよう/行供養・ぎょうくよう」の三種があり、そのなかでも教えを実践する供養、すなわち「自己犠牲の行為によって行方行供養にそ、『本当の供養』である」と庭野開祖は示します。

— 私は「法の実践をする『行供養』」を実践しているか？ 「自己を犠牲にするという“我を無くした”法の実践」を、どこまで実践しているか？ ぶり返ってみましょう。

もく ねん
黙 然

(P343・終3行/P254・7行)

仏さまがご説法をなさるのも、もちろん有難いことですが、ただじっと黙って座っていらっしやることにも、無量の深い意味があります。

しゆい
《息惛のひととき ③》

『黙然もねん』とは、「じっと黙っている」の意味です。人は「何を言うか？」「何を言葉にするか？」も大切ですが、「何を言わないか？」も大切であると言えます。

この「黙る」という「黙然」ということについて、少し考えてみましょう。

『^{しょうあい み す}所愛の身を捨てにき』 (三三八頁 七行)

『^{しょうあい み す}所愛の身を捨てにき』

(P347・2行/P257・4行)

いい言葉です。誰しも自分を愛(いと)しくない人はありません。～ほかの生物と違って、「精神」というものを持ち、「相互扶助・共存共栄」の社会生活を営む、一段高い生物である人間には、その高さのゆえにその大切な自分というものを犠牲にしなければならぬことが多いのです。～もしそれがなかったら、鳥や獣(けもの)や虫の生き方と少しも変わりはないものになりましょう。

《^{しゆい}思惟のひととき ④》

『精神』というものを持つ人間は、大切な自分というものを犠牲にする(『自己犠牲』)することは、人間の社会では多いもので、この『自己犠牲』をしなければ、鳥・獣・虫と変わりはないと庭野開祖は示します。

《^{しゆい}思惟のひととき ①》でも確認しましたが、この『自己犠牲』することについて、かみ締めてみましょう。(例:「鳥・獣・虫と変わりはない」ということは、『^{しゆせい}畜生界』と同じ?)

『^{こ ちかい な おわ}是の誓を作し已って^{じねん げんぶく}自然に還復しぬ』 (三四一頁 四行)

『^{じねん げんぶく}自然に還復しぬ』

(P368・2行/P274・2行)

(焼き尽くしてしまった両腕か) また元通りになったということは、自己犠牲の行為によって。自己はけっして損(そな)われもしないし、マイナスをこうむるものでもない。～肉体を損減(そんげん)したからといって、人間の本质である『^{しゆせい}仏性』は決して損(そな)われもしなければ、減りもしないのです。

《^{しゆい}思惟のひととき ⑤》

『自然(じねん)に還復(げんぶく)しぬ』。真心からの「自己犠牲」は、それは単に「犠牲」に終わらず、たちまちに戻ってくる(復元する)と説かれています。

—この「復元する」ということ、そして「自己犠牲」について考えてみましょう。

※『^{かいこう}回向』/ 本来自分が受ける功德を、他に振り向ける。

法華經の素晴らしさを十の譬(たと)えて説かれる。

①【すべての教えを包容する】『一切の川流・江河の諸水の中に、海爲れ第一なるが如く』

(三四二頁 三行)

②【最高かつ中心となる教え】『土山・黒山～衆山の中に、須彌山爲れ第一なるが如く』

(三四二頁 五行)

③【世を明るく照らす教え】『衆星の中に月天子最も爲れ第一なるが如く』

(三四二頁 七行)

④【不善の闇を照破する教え】『日天子の能く諸の闇を除くが如く』

(三四二頁 終四行)

⑤【感化力第一の教え】『諸の小王の中に、轉輪聖王最も爲れ第一なるが如く』

(三四二頁 終三行)

⑥【救済者中の救済者】『帝釋の三十三天の中に於て王なるが如く』

(三四二頁 終二行)

⑦【仏道へ導く父・仏教の包容性】『大梵天王の一切衆生の父なるが如く』

(三四三頁 一行)

⑧【一切衆生中第一の人間】『一切の凡夫人の中に～是れ第一なるが如く』

(三四三頁 二行)

⑨【独善的でない菩薩第一】『一切衆生の中に於て亦爲れ第一なり』

(三四三頁 六行)

⑩【諸經の王】『佛は爲れ諸法の王なるが如く』

(三四三頁 終五行)

『諸經の中の王なり』『法華經』こそが“諸經の王”なのであります』

『能く是の經典を受持することあらん者も亦復是の如し。一切衆生の中に於て亦爲れ第一なり』 ㊟ (三四三頁 五行)

此の經をよく信じ、しっかりと持ち続ける者は、一切衆生のなかで第一の存在です。

法華經を受持する者は一切衆生のなかで第一の存在であると説かれている。～とりもなおさず我々のことです。ですから、我々は“一切衆生の中で第一の人間”なのです。

《^{しゆい}思惟のひととき ⑥》

庭野開祖は『法華経』に巡り合えた私たち、法を実践する私たちは、『一切衆生の中で第一の人間』である」と示しています — このことをかみ締めてみましょう。

『此の經は能(よ)く一切衆生を救いたもう者なり。～諸(もろもろ)の苦惱を離れしめたもう。此の經は能(よ)く大(おおい)に一切衆生を饒益(にょうやく)して、其(そ)の願(がん)を充満(じゅうまん)せしめたもう』 (三四三頁 終三行)

この『法華経』は一切衆生を救い、苦惱から離れさせ、豊かな尊い利益を与え、その願いを満足させるものであります。

其(そ)の願(がん)を充満(じゅうまん)せしめたもう

(P392・1行/P294・3行)

願(がん)は、決して「物質的な満足を得たい」とか、「安楽な暮らしをしたい」というような、目先の望みではありません。～

(仏教でいう願とは) 第一に、究極において、「人のため世のため」になろうという「利他の願」であるということです。

第二に、理想の達成を強く願い、固く誓う、その「決意」の点にあります。

《^{しゆい}思惟のひととき ⑦》

庭野開祖が説くこの『願』の第一「人のため世のためになろうという利他の願」(物質的満足を求め、安楽に暮らしたいという望みではない)、第二「理想に向けて固く誓う願」と比べて、私が今、持っている『願』との違い、開きがあるでしょうか? 振り返ってみましょう。

※『朝のこぼし』—

「目覚めたこのいのちに感謝し、今日一日、このいのちを、多くの人々の幸せのために、己の魂の高まりのために使わせていただきます。」

『能く衆生をして一切の苦・一切の病痛(びょうつう)を離れ、能く一切の生死(しょうじ)の縛(ばく)を解かしめたもう』

『法華経』は、一切衆生の悩み・病気による苦を取り除き、生死(しょうじ)の輪廻の束縛から解(と)き放つものです。 (三四四頁 四行)

『諸(もろもろ)の魔賊(まぞく)を破(は)し、生死(しょうじ)の軍(ぐん)を壊(え)し、諸餘(しよよ)の怨敵(おんてき)皆(みな)悉(さい)く摧滅(さいめつ)せり。善男子(ぜんなんし)、百千の諸佛、神通力を以て共に汝を守護したもう』 (三四五頁 終二行) あらゆる魔を打ち払い、現象の変化という難敵を克服し、あらゆる心の敵をすべて打ち砕くことができます。ですから善男子よ。法華経を実践する者はあらゆる諸仏が守護するのです」

※仏教は—

苦(問題)の『解決』は説いていない。苦(問題)からの『解放』を説いている。

こ ひと げんぜ うち つね しょうれんげ か いた み もうく なか つね ごずせんたん
『是の人、現世に口の中より常に青蓮華の香を出し、身の毛孔の中より常に牛頭梅檀の
香を出さん』 (三四六頁 四行)

その人の語る言葉によって周囲の人々を「自然に感化」し(青蓮華の香を出し)、高い徳分が行動に現れて「自然と感化」(身の毛孔の中より常に牛頭梅檀の香を出さん)するようになるのです。

《思惟のひととき ⑧》

『口の中(うち)より常に青蓮華(しょうれんげ)の香(か)を出(いた)し～常に牛頭梅檀(ごずせんたん)の香(か)を出(いた)さん』 — 日頃の私はどのような香り「言葉」を「口」から発していますか? どのような香りの「態度」を「体」から発しているのでしょうか? 振り返ってみましょう。

薬王菩薩本事品の要旨

(P433・終4行/P326・終3行)

この品で教えられている要旨は—

- 一、人間にとって自己犠牲ほど高貴な精神はない。
- 二、実践こそが教えに対する最高の供養。

(この品を受持する功德が強調して説かれていますか) これは、**教えは実践して初めて生きるものであり、身を以てする「法華経の実践の尊さ」を主眼に置いたものであるから**です。(P399・終2行/P300・4行)

《思惟のふいかえり まとめ》

今日の『薬王菩薩本事品第二十三』の学びを通して、何を学び取ったか?
(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) 振り返ってみましょう。

合 掌